
Doll Master ‡ 人形師 ‡

如月 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D o l l M a s t e r † 人形師 †

【Nコード】

N 3 1 3 3 B

【作者名】

如月 海

【あらすじ】

主人公が向かうは森の奥深くにあるという洋館。そこで、会ったのは1人の少女だった――。

第1話 訪問者

第1話 訪問者

人形師——それは字の如く、人形を作り出す職人たちの事をいう。しかし、はるか昔は数多く存在していた人形師も、今ではその数を減らした。

残った人形師も人目のつかぬ場所でひっそりと暮らしているという——

§§§

私の名は零。^{シズク}今は亡き、祖父の跡を継ぐべく修行中の人形師見習いだ。

私は今、とある人形師に会うため、森の奥深くにあるという洋館に向かっている。

その、とある人形師というのは、とても有名な一族の最後の末裔とかで、とにかくとても腕が良く、その人が作る人形はまるで生きているかのように動くという。

そういえばその一族は『人形に魂を込める一族』とか、『人形に永遠の命を与える一族』とも呼ばれていた。その一族の末裔である。その人形師の名は——。

森の中を進むこと数時間、やっとその人形師が住むという館の前までたどり着いた。

——どうやら、その人形師はよほど人嫌いが激しいらしい。朝早くに出発したというのに、もう空は夕日で赤く染まっていた。

もう直ぐ、辺りは暗くなりはじめだろう。

私は肩にかかる薄茶の長い髪をはらい、古い洋館を見上げる。
本当にこんな所に人が住んでいるのだろうか。

音どころか、人の気配すらも感じない。

…もしかしてデマの情報をつかまされたか？なにせ情報を買ったのは90あたりの痴呆がはじまったような爺さんだし…。

いや、せつかくここまで来たんだから、とりあえず人がいるかどうかだけでも…。

いてもいなくても今夜は野宿だろうし。

私は大きく息を吸い、声をかけた。

「たのもおー！ー！！！」

静かな森に不釣り合いな大声が響き渡る。

暫く待つが、人が出てくる気配はない。

もう一度声をかけるか迷っていると、扉が控えめに開かれ、一人の少女が出てきた。

漆黒の髪に黒曜石のような瞳。

赤い花柄のワンピースを着ている。

美人というわけではないが、可愛い整った顔つきをしている。
10〜13歳というところだろうか。

——というか、人いたんだ…。

私が、人がいたことに驚き、少女をじっと見つめていると、少女は怪訝そうな顔で尋ねてきた。

「あ、あの…。なにか御用でしょうか…？」

やっと我に返り、しどろもどろに答える。

「あ、えっと…。君この子だね？私ここに、怜^{レイ}つていう人形師がいるって聞いてきたんだけど…。君が、怜…さん、かな？」

たしか青年って聞いてたんだけど…。
すると少女はクスリと笑い、答える。

「いいえ。違います。怜のお客様ですね？ここではなんですから、どうぞ中へ」

そう言うつと少女は背を向け、館の中へと入っていく。ギシギシと床が音を立て、この館がずいぶん古いことを物語る。

「…。おじゃまします」

私も少女の後をついて中に入る。

「ここまで来るのは大変だったでしょう」と言われ案内されたのは広い客間のような部屋だった。二人かけのソファ―に座りお茶を出される。紅茶のいい香りがした。

「少しここでお待ちください」

そう言うつて少女は私の向かいに座る。

「えつと…君は…？」

「ああ、申し遅れました。私は紅燐「コウリン」と申します。怜が作った人形です」

「……え？？…人…形…？？…君が…？？」

一瞬間の中が真っ白になった気がした。

「はい」

少女は当たり前のように即答する。

まさか。こんな、人間にしか見えない少女が…人形？？こんなことがあるのだろうか。

私は少女——紅燐を頭からつま先までじいじと見つめる。

紅燐は恥ずかしくなったのか、少し目を伏せ、視線を床に向ける。ほら、こんな仕草もまるで人間…いや、確実に人間だ。

「そ、その…。こう言っちゃなんだけど、本当に人形？」

「ええ。私は怜が作ってくれた人形です」

紅燐はなおもきっぱりと答える。

…どうやらこの子の言ってることはウソやごまかしの類ではなさ

そつだ。と、言う事は。この館の主であろうつ伶という人は、本当にすごい技術の持ち主…いや、すごいどころじゃあないだろう。

私がそんなことを考えこんでいると、紅燐が質問してきた。

「あの、貴女の名前は？」

「…え？ああ、ゴメン。ちょっと考え事をしてて。えつと、私の名前は雫。よろしくね。紅燐ちゃん」

「はい。よろしく願います。…その、なぜ雫様は此処へ？それと、どうやって此処の場所がわかったのですか？」

「雫様つて…。雫でいいよ。あと、敬語も無理しなくていいから。私がここへ来たのは、世界一と謳われる人形師に会うため。そして、その人が作った人形に会うため。この場所はある馴染みの情報屋の爺さんから聞きだしたのよ」

すると紅燐は少し悲しげに訊いてきた。

「…雫さんは、伶に会ったら、どうするんですか？」

「んゝ。どうするって言われてもなゝ。とりあえず会ってみなくちゃわかんないかな。私、こう見えても、人形師見習いなんだよね。だったらこんなにすごい人形を作る人だもの、どんな人だか知りたじゃない？」

「そうですか」

そう答えると紅燐は黙り込んでしまった。

部屋に気まずい沈黙が漂う。なにかおかしいことでも言ったのだろうか…。

とにかく、私は一番訊きたいことを訊いてみることにした。

「えつと…。それで、私は伶さんっていう人に会えるのかなあ？」

— b e t o c o n t i n u e —

第1話 訪問者（後書き）

初めての投稿となります。拙い作品ではありますが、どうぞ宜しくお願い致します。感想や、意見、お待ちしております。

第2話 出会い

第2話 出会い

『人は人との出会いや別れ、関わりを通して、生きる希望と意味を知るんです。

今はわからなくても君にもいつか、わかる 때가来ますよ……』
あの人はいつもそう言っていた……俺は知る事ができたんだろうか——生きる意味を

§§§

私は会ってもらえるのだろうか……世界一の人形師に——怜という人に。もしかしてここまで来たのは無駄だったのかもしれない……。会ってもらえないかも……。

「大丈夫だと思いますよ」

私の問いに紅燐はあっさりと肯定した。私が困惑していると紅燐は構わず続ける。

「たしかに怜は人とあまり会いたがりません。だけど、こんな山奥まで来た客人を追い返すような人ではありませんから。大丈夫ですよ」

私はそれを聞き、ほっとする。

その時、客間の扉がギイと音を立て、開いた。

「会ってもいいみたいです」

いきなり入ってきたのは活発そうな（というより生意気そうな、と言ったほうが正しいか……）紅燐と同じくらいの年頃の少年だった。

少年は紅燐にそれだけを告げ、さっさと部屋を出ていった。

出ていく間際、彼の琥珀色の瞳がこちらを睨みつけていたのは気のせいではないだろう。

「では怜の所までご案内いたします。私についてきてくださいね」
そうつと紅燐は客間をあとにし廊下へと出る。

私は慌ててついていき、紅燐に並んで歩く。

「さっきの子は・・・？」

「今のは紅蓮コウレンといいます。私と同じく怜に作られた人形ですよ」
またもやサラリと告げられた事実にクラリと眩暈を覚える。

だって紅燐にしろ、さっきの少年にしろ、まるで感情を持った人間にしか見えない。

・・・やはり怜という人形師は、かなりの技術者のようだ。

紅燐が扉の前で立ち止まる。

どうやらここが怜の部屋のようにだ。

とても緊張する。

自分の心臓の鼓動しか耳に届かない。体が全部心臓になったよう
だ。

紅燐は一度雫を振り返り安心させるように、にこりと微笑む。
そして笑顔のまま、「大丈夫ですよ」と一言言つと、扉をノック
する。

「怜、お客さまをお連れしました」

「・・・入れ」

中から短く返事がくる。

紅燐は躊躇うことなく扉を開け、雫に中に入るよう目で促す。

「し・・・失礼します」

ゆつくりと中に入ると薄暗い部屋の中に1人の青年が座っていた。

「お客さん、ご用件は？」

青年はこちらに背を向けたまま言う。

そんなに大きな声でもないのに青年——怜の声は室内に綺麗に響いた。

けれど、どこか人を突き放すような冷たい声だった。

「わ、私を・・・私を弟子にしてください！！」

私は勢いよく頭を下げ、緊張のためかこの場に不釣り合いな大きな声を出してしまう。

——それにしても。

私は今、何と言ったか……。私は「世界一の人形師」に会うために此処へ来た・・・はずだ。

会ってからのことなんかちっとも考えてなかった。・・・なのに。

私は、自分が無意識のうちに弟子になりたいと言ったことに戸惑いを隠せなかった。

何故かそう言わなければならない、と感じたのだ。

怜は、椅子を回転させこちらを向く。

頭を下げたままの私には表情はおるか、顔も見えない。

「お客人。名は？」

怜はやはり冷めた声音で私に問いかける。

私は頭を上げ、怜と対面する。とてもドキドキしていた。

歳は、十五、十六あたりだろうか。青年と呼ぶにはまだ若い。

髪は灰色で、もうすぐ肩に届きそうだ。前髪が異様に長く、目を覆い隠している。

肌は真っ白で、光を反射しているように思える。全体的に色素が薄いようだ。

表情は全く見えないが、とても冷たい、人を拒絶するような才——ラを纏っていた。

私は怜を見て、彼こそ人形なのではないかと思った。それほどま

でに生気が全く感じられないのだ。

「・・・雫といいます」

緊張がそのまま声に出てしまう。喉がはりつき声がうまく出せない。

怜は暫く考えるような、値踏みをするような仕草を見せる。

なんとか怜の表情を読み取ろうと試みたが、前髪のせいで肝心の瞳は見る事が出来ない。

「勝手にするといい」

怜は薄い唇を開くと投げ捨てるように言い、また背を向ける。

「紅燐。雫を部屋に案内してやれ」

「はい。いつもの部屋でいいですか？」

「ああ」

2人のやりとりを啞然として見つめる。

まさか、こんないきなりの願い出が叶うとは思ってもみなかったのだ。

私がぼうつと突っ立っていると、紅燐が話しかけてきた。

「では雫さん、部屋へご案内します」

「あ・・・は、はい！」

「こちらです」

案内された部屋は、家具こそ少ないが掃除がしつかりとしてあり、清潔だった。

換気のためか少し開いた窓からは冷たい風が入り込んでくる。窓の外は日がとくに沈み、暗闇に包まれていた。

「他の部屋にも出入りは自由ですよ。何か不都合な所がありましたら、遠慮せず言ってください。他の部屋を用意しますから」

紅燐から一通り説明を受ける。

「では、何かわからないことなどありましたら、私の部屋か、台所にいますので声をかけてくださいね」

紅燐はそう言い残すと部屋から出て行く。

私は溜息をつく、ベッドに横になる。

今日は緊張したり驚いたりしっぱなしだったから、体からどっと疲れが出る。

私はそのまま目を閉じ、木のざわめきを聴きながら深い眠りへ就いた。

夏の日差しは夜の闇へ消え、空にはたくさんの星が瞬いている。
森の奥深くにある大きな屋敷は静かな闇へと吸い込まれるように在った。

——そして、1人の青年の赤い夢がはじまりつつあった……。

— b e t o c o n t i n u e —

第2話 出会い（後書き）

D o l l M a s t e r（以下略してDM）の2話になります。1話よりもだいぶ遅れてしまいました。3話はもう少し早くお届けできる予定です。・・・って読んでくれた方がいるかどうかは不明ですが。感想、意見または批判などでも構いません。お待ちしております。最後にこの作品を読んでいただいた方に多大なる感謝を。

第3話 過去

第3話 過去

．．．母さん　．．．紅蓮　．．．紅燐　．．．蒼翠^{ソウスイ}　．．．師匠

．．．お願いだから．．．置いてかないで．．．俺を．．．独りにしないで――

§§§

黒くて赤い夢。

果てしなく続く闇の中には微かな光すらなく。

物の色など識別することはできないはずなのに俺の目には鮮やかな赤が暗闇の中に見えた。

暗闇の黒。そして足元に広がる――赤。

それだけがこの世界の全て。

温かい液体は確かに自分の体の中にも巡っているものであることは俺にもわかっていた。けれど認めたくない。

自分の足に触れるものや鼻に漂ってくる匂いの根源がそれだということを。

突然、俺の体から力が抜けていき、その場に立っていることができず座り込んだ。

赤い液体はヒトの手のような形をとり俺の腕を掴む。

自分たちの方へと引き込むように引つ張る手。

俺の体は呆気なく倒れ肌も服も真っ赤に染まる。

無意識に伸ばした手を包む温かい感触に俺は安心し目を閉じた。

§§§

「・・・っ！」

目を開けると其処には見慣れた天井が広がっていた。

「夢・・・？」

誰に問い掛けるわけでもなく零れ落ちた言葉。

ふわり、髪を揺らす空気の流れ。

開いた窓からの心地よい風に俺は目を閉じた。

「紅蓮か・・・」

夢の中で感じた手の温もりを思い出しそつと微笑む。

§§§

——カタン・・・

小さな物音が気になり、私は部屋を出る。音のした方へ歩く。

古い床が軋み、ギシギシと音を立てる。

その音で紅燐達に気付かれないように、ゆっくりと歩く。

「紅蓮・・・？」

そこには、月明かりに照らされた一体の人形が立っていた。

茶色の髪が、月の光の為か黄金色に輝いているように見える。幻想的な光景に私は息を呑んだ。すると、人形——紅蓮はどこかほつとしたような表情で私の方を振り返る。

「アンタか・・・」

声にも安堵の響きがあった。

私がおかを言う前に紅蓮が言い放つ。

「怜にも紅燐にも何も言うな」

「何故？」

「無駄な心配なんてかけたくないんだ」

琥珀色の瞳に悲しみの色が浮かんだように見えた。しかし、それも一瞬でいつもの硝子玉でできた、冷たい瞳に戻る。

「何故この館に来た？何の為に怜に近づく？」

どうしてこんな質問をするんだらう？

私は疑問に思いつつも、はつきりと答える。

「人形師になって祖父の跡を継ぐために」

すると紅蓮は私を見据え、告げる。

「―それなら、怜を傷つけたり、裏切るようなことは絶対するな。その覚悟ができれば此処から出て行け。もし、アンタが怜や俺達を裏切れば――俺はアンタを殺す・・・」

紅蓮に睨まれ、私は全身から冷や汗がどつと噴き出るのを感じる。紅蓮の本気がひしひしと伝わってくる。

その瞳には、私に対しての強い警戒心が映っている。そして――大切な人達を守り通そうとする決意が表れていた。

私が恐怖のせいで動けずにいると、紅蓮はその横を通り自室へと向かって行った。

「アンタもう寝たほうがいいぜ」

振り返らずに紅蓮が言い、今度こそ闇に紛れて見えなくなった。月だけが何も無かったかのように空に浮かんでいた。

§§§

紅蓮は、雫と別れると自室へは向かわず、怜の部屋へ再び来た。

怜は規則正しい呼吸で眠っている。紅蓮は怜の寝顔をしばらく見ていたが、ふと目を閉じる。

『人形は人間と違ってずっと僕のそばにいてくれるんですよね？』
幼い怜の声が頭の中で響く。

『ええ。そうですよ。でも、怜君にはずっと一緒にいてくれる友達がいるでしょう？』

怜の人形作りの師であり、この館の前の主であった男——名を啓ケイという——が優しい声音で言う。

『彼らを大切にしなさい。君にとって、彼らは家族と同じ存在なのですから』

紅蓮は目を開けた。

もう、何年も昔の事だったが、目を閉じるといつもこの会話が鮮明に思い出される。

そうだ、あのころはずっと一緒に居られると思っていた。当たり前のように。だけど、俺は怜を裏切ったんだ。怜を傷つけた。悲しませた。だから——

そこまで考えたところで、怜の異変に気付く。

顔が血の気を失い、蒼白だった。それなのに全身にじつとりと汗をかき、苦しそうにうなっていた。何か悪い夢を見ているようだ。

「……！怜！大丈夫か？！」

紅蓮は怜の体を抱え起こす。

「こう……れん……」

怜は、紅蓮の服にしがみつき、震え出した。

「……怜、大丈夫か？」

紅蓮はもう一度怜に問いかける。しかし、怜は答えることはなくぎゅっと紅蓮の服を掴む手に力を込める。まるで迷子の子供が母親にするように。けして離すまいと。

「……怜、大丈夫だ。俺はお前を置いていかない」

「本当に？」

弱々しい小さな声で怜は訊く。

「ああ。俺も紅燐も、二度とお前を置いて行ったりしない」

紅蓮の言葉を聞き、安心したのか怜はふっと微笑みまた眠りに就いた。

紅蓮は怜をベッドに横たえ、灰色の髪を撫でるとひとつ溜息をつ

き、部屋を後にする。

§§§

紅蓮は自分の部屋に戻ると、窓越しに月を見上げる。

窓の外ではさっきは降っていなかった雨がパラパラと降り出して
いた。

「そういえば、昔頃から泣き虫な所だけは変わらないな・・・」
誰に言うわけでもなく、独り言をもらす。

だから――

俺は誓った――

もう二度とアイツを独りにしないと。

今度こそ、大切な人達をこの手で守ると。

あの日――俺と紅燐が怜によって作り出された日に――誓ったん
だ。

紅蓮は月を見つめながら、せめて今夜だけは怜が悪夢にうなされ
ないよう、居るはずもない神に祈った。

— b e t o c o n t i n u e —

第3話 過去（後書き）

D Mの第3話になります。読んでくださった方有難うございます。
これから物語が動き出すので精一杯書いていこうと思います。どうぞ、お付き合いの程よろしくお願いします。

第4話 眞実【壱】

第4話 眞実【壱】

星の光は 何万年もの年月を越え この地へと届く
遙か昔放たれた光が 今 この場所を照らし始める
そこには ひとつの眞実が 存在した

§§§

私が人形師見習いとしてこの館へ来てから、早くも二ヶ月目が過ぎようとしていた。

森のあちこちにある、もみじやイチョウの葉は赤や黄色に染まり始め、日が暮れるのもだいぶん早くなった。

・・・それなのに。

私がここへ来てから、怜には食事の時にしか会わないし、修行らしい修行は一度もやっていない。

毎日、紅燐の仕事（主に家事全般）を手伝ったり、図書館（何故かこの館にはあるのだ。かなり立派なのが。）で本を読んだりして過ごしている。

怜曰く、『全く知識の無い奴に教えるのは思ったより難しいんだ（面倒だから）基本的な知識は自分で身に付けさせたほうが後々のためにもなる』だそうだ。

どうして私が初心者だとわかったのか・・・。
怜は不思議なところばかりだ。見た目はとても若く見えるのに、

雰囲気はとても大人っぽい。それに、いつも人の心を見透かしたような言動をとる。

だけど、常に人を拒絶したような振る舞いを見せ、顔を合わせることはほとんどない。（まあ、私が余所者だということもあるだろうけど・・・。）

私はそんなことを考えながら、もう何回も読んだ『人形師入門』の本を閉じる。

この図書館の棚はすべて人形師に関わる本（ざっと三百冊はあるうか。）で埋まっている。今日は午前中に紅燐の手伝いを済ませ、午後からここで本を読んでいた。

だが、ここの本は大体読み尽くしたため、ぼーっと考えに耽っていたのだ。

開いた窓からは優しい秋の日差しと微風が入り込んでくる。

何気なく棚に目を向けると、一冊の本が目飛び込んできた。

それは本棚の端の端、奥深くに一冊、埃をかぶり眠っていた。

特に変わった所はないが、何故かとても気になり誘われるように手に取る。

埃をはらってもかなり古い物だとわかる。

めくってみると、たくさんの写真が整理され並んでいた。

そのひとつひとつの下に綺麗な整った字で札がついていることから持ち主の几帳面さが伝わってくる。

この頃はまだ多くの人形師がこの館にいたのか、大勢で写っている写真がいくつもある。

おそらく、一番多く写っている黒髪の青年がこのアルバムの持ち主なのだろう。

腰に届きそうなほど長い黒髪を後ろでひとつにしばっている。

歳は20〜22くらいで、眼鏡をかけている。

その眼鏡の奥の瞳は黄金色で、とても温厚そうな笑顔をしている。なんか優しそうな雰囲気の人だなあ。

そんなことを思いながら、次のページをめくった。

『怜君、紅蓮君、紅燐さんと』

その写真は他の写真と同じように貼られていた。

怜と紅蓮と紅燐と持ち主だろう青年の写った写真。

私はその札の文字を読むと次のページに進もうとした。

しかし、あることに違和感を覚え、手を止める。

もう一度先程の写真をまじまじと見る。

違和感が気のせいでないことを確認すると、一瞬にして私の頭の中で情報が整理され、一つの仮説が浮かび上がった。

しかし、私はこの仮説を否定したくてたまらなかった。

もう一度違う仮説を立てようとするが、どうしても腑に落ちない点が多すぎる。結局、初めに立てた仮説しか浮かばなかった。

でも、こんなことがあつてはならないのだ。絶対に。

私はアルバムを片手に図書館を飛び出した。

この館の主の部屋へと急ぐ。真実を知るために。

後には開けられたままの窓と、そこから入り込む風によってぱらぱらとページがめくれている本が一冊。そしていつの間に入ってきたのか、紅葉^{もみじ}の葉が一枚。

それらが穏やかな秋の日差しの下にあるだけだった。平凡な秋の

昼下がり

| b
e
t
o
c
o
n
t
i
n
u
e
|

第4話 真実【壱】（後書き）

D M、第4話になります。とうとう物語が急展開！する予定です。
第5話では、怜の秘密が明らかになります。（予定）

第5話 真実【弐】

第5話 真実【弐】

そこにある真実とは 陽の光を見ることなく
ただ永遠と 暗闇の中 静かに存在した

今 日が昇り 世界が光に満たされる
はたして 真実とはいかなるものなのか――

§§§

茶色の長い髪が廊下を横切るのを見て紅燐は手にしていたインク
つぼを床へ落とした。

古ぼけた床はそれを受け止めコトリと小さな音をたてる。つぼの
中から零れ出したインクが床板に黒い染みを作った。

しかし紅燐はそのことを気にも止めずただ立ちつくしていた。
彼女の目は先程通り過ぎた雫が持っていた赤いアルバムを映した
瞬間、瞬きをやめていた。雫があのでアルバムを持って怜の部屋へ向
かうその瞬間を。

紅蓮は雫さんがあのでアルバムを持っていることを知っているのだ
ろうか。

おそらく彼女はあれを怜に見せる気なのだろう。

紅燐は紅蓮の名前を呼んだ。

どういつ理由で彼女が怜にあれを見せるかはわからないがそれは
紅燐たちにとってどうしても避けなければならぬ事だった。

「紅蓮！――」

紅燐は探し求めていた姿を見つけその少年の名を呼んだ。

「紅蓮！」

紅蓮は屋敷の庭にある東屋の傍に立っていた。

紅蓮は紅燐の方へ振り向き、ゆっくりと近づく。

「雫さんが——」

「知ってる」

紅燐の言葉を遮り紅蓮が言い放つ。

その言葉を聞き、紅燐は自分の耳を疑った。紅蓮の言っていることが信じられないのだ。

「アルバムだろ」

「知ってるならなんで・・・！」

止めようとしなかったのか。そんなに落ち着いていられるのか。言いたいことはいくつもあるがどの言葉も口から出てくることはなかった。

紅蓮がいつもの彼らしくないことに気がついたからだ。いつもは弱いところなど絶対に見せたがらない彼が今はとても辛そうに見える。

紅燐は何も言えず辺りがしーんと静まりかえる。そんな中、先に口を開いたのは紅蓮だった。

「俺たちにはいい機会なのかもしれない・・・」

静かな声で、それでも確信を持った様子で言う。

しかし、紅燐は彼の言っていることが納得いかず反論の声を上げる。

「機会！？紅蓮はあのアルバムを怜に見せるべきだと？怜の前にまた真実を——現実を突きつけるって言うの！？」

悲痛な叫び。あれを見せれば怜は今度こそ壊れてしまうと。正気には戻れなくなると。

紅蓮はただそれを黙って聞いているだけだった。紅燐は彼の態度

にますます声を強める。

「紅蓮は・・・怜が大切じゃないの!？」

「大切じゃないわけないだろう!！」

紅燐は思わず肩をすくめる。紅蓮は怒りっぽい性格だが、怜や自分に対して怒ることは稀だった。

紅蓮は一度大きく溜息をついた。別に怒っている訳ではないが、どうしても感情が昂ぶる。なんとか感情を抑えるとしっかりと紅燐の瞳を見据える。

「大切じゃないわけじゃない。怜は俺にとって大切な存在だ。壊れていくのは見たくない」

「なら・・・なんで・・・」

紅燐は人間ならば涙を流していただろう、とても悲しそうな顔をしていた。

「大切だから・・・だから、このまま苦しんでいるのは嫌なんだ。できることなら俺は怜を苦しみから解放してやりたい。」

「そ・・・れは、私だってそうだけど・・・でも私たちが駄目だったじゃない」

「ああ。俺たちじゃ怜を助けてやることはできない。けど・・・」
「雫さんにならそれができるの?」

「・・・多分。アイツはあのアルバムを見つけることができた」
そうだったのだ。いままで何人かの人形師がこの館を訪れ弟子になろうとした。けど実際に弟子になる事ができたのは雫ともう一人のみなのだ。（正確に言えば、弟子になれなかったのではなく弟子になってすぐに紅蓮によって館から追い出されたのだが。）

彼は・・・もう一人の怜の弟子はアルバムを見つけることは出来なかった。つまり怜を救うことは出来なかったのだ。

紅燐はゆっくり歩きだした。紅蓮の横を通り過ぎ、さっきまで紅蓮が見つめていた物の傍に立った。

「・・・彼の導きでしょうか」

そこには墓標が二つ並んでいた。そのうちの一つを見つめ、紅燐

は尋ねる。

「信じたくなえけどな」

紅蓮も紅燐の隣に立ち、冷たい石を見つめた。

もう二人とも普段の様子に戻り、ただ怜が救われることだけを祈っていた。

ssss

少年のまま時の止まった人形師

それが私が考え出した怜の正体だった。

写真の中で変わらないもの。

紅燐と紅蓮と——・・・怜。

四人の後ろに写っている屋敷は真新しかった。

紅燐と紅蓮は人形だ。変わらないのも当たり前だろう。

けど、怜は違う。怜は人間だ。

普通の人間ならば老いるはずだ。

しかし、写真の中の怜は今と何も変わっていない。

私が違和感を感じたのはそこだった。

長い年月を経て、すっかり変わってしまった建造物とは対照的な
変わらない怜の姿。

いや、少し・・・本当に少しだけ幼いようにも見える。といっても
三年ほどだろう。

それでも、決定的におかしい点がある。それは、その写真の日付
だ。

写真の右下に記されている日付は今より55年も前を示していた。
これは想像に過ぎないが、三人と一緒に写っているこのアルバムの
持ち主である青年はおそらくもう亡くなったのだろう。生きてい

たとしたら、もう80年は生きていることになる。

「・・・怜」

私はアルバムを怜に見せ、自分の考えを告げた。

どうか怜の口から間違っていると否定してくれないだろうか。
実はそっくりさんでたまたま名前も一緒だったただけだとか。

「ああ、その通りだ」

ゆっくりと開いた口から出た言葉は私が望むものではなかった。

「うそ・・・。だって・・・そんなこと・・・あるはずが・・・」

「残念ながら本当の事だ」

よく響く綺麗な声は耳に届いているはずだが私の脳は理解することを拒んだ。

私のことは気にせず、怜は話し続ける。

「訂正する点があるとしたら俺のことではなく彼等のことだろう。
それともう1つ。この人・・・師匠のことだ」

そう言って細い指が差したのは写真に写った人形たちと・・・
アルバムの持ち主であろう青年だった。

「この写真を撮った頃ならば彼等はまだ人形ではない」

「・・・まだ・・・？」

私の頭は混乱しきっていて怜の話を聞くだけで精一杯だった。

「雫・・・真実を・・・全てを知りたいのなら教えてやってもいい。
ただ話を聞いて後悔しても俺は知らない。どうする？」

まるで私を試すかのような質問に私は自然と頷いていた。

これから、どんな真実を知ることになるか考えもせずに――・・・。

— b e t o c o n t i n u e —

第5話 真実【弐】（後書き）

DMの第5話になります。あと2話ほどで完結の予定です。

第6話 眞実【参】

第6話 眞実【参】

朝日の下 眞実は

その姿を露わにする――

§§§

「とりあえず座るといい。長い話になる」

怜はそういうと机をはさんで向かいにある椅子を指した。

私は言うとおり椅子に座り、怜の顔を真正面から見た。とてつもない威圧感があつたが何故か目を逸らしてはいけなと思ったのだ。といつても怜の目は前髪のせいで見ることは出来ないが。

「代々、俺の人形師一族は当主になつた時点で成長を止める」

怜はゆつくりと口を開き話し始めた。まるで昔のことを思い出すかのような口調で。

「そして次の当主になる者が現れるまで死ぬことはない。いやでも生かされるんだ」

淡々と語る怜の声にはなんの感情も感じられない。しかし私はその言葉の裏に怜の苦しみや垣間見たような気がした。

死ぬことを許されない苦しみとは一体どれほどのものだろうか。考えても結論がでるとはとうてい思えなかった。そんな非現実的な現実を彼は――怜は生きているのだらう。私には想像もできない。

「俺が人形師として師匠に認められたのは15の時だ。その時からもう50年近くこの体のままだ。さっきの写真に写っているこの

黒髪の人が俺の師匠だ。このアルバムはもともと師匠の物だった」
机の上に広げられたアルバムの中の青年を指差し、懐かしむように言う。

「師匠は先代の当主であり、俺の人形の師でもある。」
ということはこの青年も怜と同じように生き続けていたのだろうか。もしかしたらまだ生きているのかもしれない。

「この人は・・・今何処に？」
躊躇いがあつたが訊いてみたくなった。

「もう死んだよ。今からもう50年も昔に。この写真を撮った時、俺は10歳で師匠は120年生きていた。師匠が亡くなったのはこの5年後だ」

「えつと・・・ごめん。」

妙な沈黙が流れた。怜はじつと写真を見ている。

ふと怜が手を前髪にあてた。

不思議に思つて見ていると掬い上げるように長い前髪を持ち上げた。

「この眼が師匠と俺、そして代々の当主との共通点だ」

そう言つた怜の瞳は写真の青年と同じ黄金色だった。私は息を呑み怜の目を見つめた。

「珍しい色だろう？これが一族である目印なんだ」

「目印・・・？」

「そうだ。この瞳は次の当主候補の目印。そして力を持つことを許された者の証だ」

「力・・・」

「人形に魂を込める力・・・人形をより人間に近づけるために、死者の魂を人形に込めるための力だ」

私は驚きを隠せなかった。もちろん怜が60年近く生きていることにも驚いたが、それ以上だ。

ここへ来る前に聞いた噂話。『人形に魂を込める一族』『人形に永遠の命を与える一族』ただの大げさな噂だと思つていただけ・・・

。 比喩や喩えではなく本当だったのだ。

ということとは紅燐と紅蓮は――

「紅燐と紅蓮はその力を使い作った人形だ。俺が力を使って作った人形は彼等を除いてあと一体しかない」

作ろうと思っただけでも作れない物もあるがな。と付け足し怜は続けた。

「紅燐も紅蓮も生きていた時は俺の幼馴染で親友だった」

そう言った怜の声はとても優しいものだった。

怜がどれだけ彼等を大切に思っているかが私にもわかるほどに。

「けれど紅燐は病気で。紅蓮は・・・村が襲われた時に他の村人と共に命を落とした。だから俺は4年後・・・その魂を人形に入れ二人を作った」

声が震えていた。大切な者を亡くしても怜は生き続けなければならなかった。村が滅びる瞬間さえも何もできずに見ていることしかできなかったのだらう。

私が黙っていると怜は気持ちを抑えるように一度溜息をついた。

「俺は時々師匠を恨むことがある」

怜はとても悲しそうな口調でまた話し始めた。前髪はもとのように怜の目を隠している。

「優しい、いい師匠だと今でも思っている。師匠としても人としてもとても優しくかった。身寄りの無い俺を引き取って俺に人形作りを教えてくれた。・・・けれど本当に師匠は俺を大切に思っただけなのだろうかと考えてしまうことがある」

怜は俯いた。そのせいか私は彼が泣いているのかと思えてきた。

「俺に人形作りを覚えてくれたのは早く俺を立派な人形師にして当主にさせるためだったのではないかと、師匠はこの苦しみから逃れるために俺を利用したのではないかと何度も考えた。否定して欲しくてももう師匠は此処にはいない」

「なら、師匠さんの人形を作ればいいんじゃないの？」

魂を込めることができるのなら師匠さんの人形を作り本人の口

から聞くことも可能なはずだ。

「無理だ。当主だった人間の人形を作ることはいできない」

「・・・何故？」

いやな予感がした。それでも訊かずにはいらなかった。

「当主が死ぬと言うのは、体や脳が活動をやめた時ではなく魂が消滅した時を指す。つまり当主になった人間の魂は心臓が止まると同時に消えるんだ」

「消・・・滅・・・」

「所詮俺らは望まれない異端児なんだ。神にすら見放されてしまつて。人形に人の魂を込めて人間に近づけるなんて本来ならばいいことではないんだから」

「じゃあ怜も・・・？」

「そうだ。俺もいつかは魂ごとこの世から消える。例外は無い。そして・・・紅燐と紅蓮もだ。彼等は死後俺に呼び戻されたがために転生の権利を剥奪された。俺のくだらないエゴのせいで・・・永遠に・・・」

怜はその続きを言おうとはしなかった。いや、言えなかったのかもしれない。溢れてくる涙のせいで。

私は怜をこれ以上見ていたくなかった。あまりにも痛々しい姿に目を逸らしたい衝動に駆られた。けれどそうすることが怜を今以上に傷つける気がしてできなかった。

「それでも・・・無理だとわかっていても師匠の人形を作ろうとしているんだから未練がましいな俺は・・・本当に」

怜の言葉は語尾が掠れて聞き取りにくかった。

静かに吸い込まれるように涙が落ちて絨毯に染みを作る。

何を言っても怜を追い詰めてしまいそうで私はなにも言えずにいた。

「怜・・・」

なんとかしてあげたい。でも自分には何もしてやれることは無い。

励ますことも、苦痛を和らげてあげること、ずっと傍にいないとでさえ。

怜が望んでいることを私は叶えることができない。

自分の無力さに私は怒りさえ覚えた。

どうして、私はこんなにも無力で何もできないのだろう。

でも、どうにかしなければ怜は永遠と悲しみ、悔やむのだろう。

紅燐と紅蓮だってそうだ。そんな姿を見ていたくはない。できることなら幸せに生きて欲しい。

「怜」

もう一度呼びかけても怜はただ泣きつづけた。静かに。

「私は、怜に何もしてあげられない。きつと何もできないし、何も言えることは無い。でもさ・・・」

怜の手に自分の手を重ね、握りしめる。

「私が生きている間なら、一緒にいてあげられる。私だっていつかは死んでしまう。けど少しの間なら、一緒にいられるよ・・・」
怜は一人じゃない。紅燐だって紅蓮だっている。これからは私だっている。怜は絶対に一人じゃないよ」

紅燐や紅蓮のように永遠に傍にはいられない。それでも、私はこの屋敷に——怜の傍にすることはできるのだ。そうして何年もかけて少しずつ怜の悲しみを取っていつてあげればいい。

「雫は師匠に似てるな。あの人も昔、俺に同じ事を言っていた」
涙を手の甲で拭いポツリとつぶやいた。

「太陽の光のように温かくて、俺には眩しい」

それから怜は優しく微笑んだ。

その笑顔は今までに見たことのないほど綺麗だった。哀しみと優しさがごつちやになったような微笑み。

例えるなら、そう・・・『月』だ。

私や師匠さんを『太陽』と例えるなら怜は暗闇を優しく眩しすぎないように照らす、儚く美しい『月』。

「雫が此処に來たのもあの人が仕組んだように思えてくる。師匠はいつも先を見ている人だったから」

それからそつと聞こえるか聞こえないか位の小さな声で彼は囁いた。

「・・・ありがとう」

私は怜の荷物を少しでも軽くできただろうか。
できているといいな、と心の底で思った。

そして願わくば彼より先に私の命が燃え尽きることはないように・・・。

——パサリ・・・。

何かが落ちる音がした。

— b e t o c o n t i n u e —

第6話 真実【参】（後書き）

D Mの第6話になります。とりあえずひと段落。次で完結（予定）です！

第7話 手紙

第7話 手紙

真実とは けして一つとは限らない
見誤ってはいけない

§§§

—— パサリ

絨毯の上に落ちたのは一枚の封筒だった。少々黄ばんでいてずいぶん古そうだ。そして宛名の欄には「怜へ」と几帳面な字で書かれていた。

「怜！これ！」

落ちていた封筒を拾い上げ、怜に差し出す。怜は一瞬きよんとした表情でそれを受け取る。

「師匠の字だ・・・」

中から一枚の紙を取り出し文面を追う。それは怜への短い手紙だった。

怜はそれを読んだ。何度も、何度も。そしてまたぼろぼろと涙を流し始める。しかし私は慌てることはしなかった。この涙が悲しみからのものではないと確信していたからだ。

怜はようやく行くべき道を見つけれただろう。

それは怜がずっと探していたものの答え。
待ち望んでいたもの。

怜はしばらく静かに涙を流しひたすら泣いた後、その手紙を大切に
そうに引き出しの中にしまった。

「俺は随分寄り道をしてしまったようだ」

「そんなこともあるよ」

「本当に長い道だった。君は俺にとつての標だったんだな」

「それは違う。これは怜が見つけた道だよ」

もし、この旅路の標があるとしたらそれは私ではない。

紅燐や紅蓮、師匠のほうだろう。

「もう過去を振り返って嘆くのはおしまいにしよう」

そう言った怜の顔はとても晴れやかだった。

そして引出しの中からハサミを取り出すと私の手に預けた。

「前髪・・・君が切ってくれないか？」

怜なりの過去との決別なのだろう。

私は頷き、怜の前髪を短く切り揃えた。

「ありがとう」

私たちが庭に出ると待ち構えていたように2体の人形が振り返つ
た。

怜の短くなった前髪を見て一瞬驚いてそれからとても嬉しそうに
笑っていた。

少し冷気を帯びた風が私の長い髪を揺らしていく。

『僕は君の幸せを一番願っているよ』

手紙の中の優しい言葉が私の耳に届いた気がした。

秋の柔らかな光が彼等の幸福を際立たせていた。

f i n .

第7話 手紙（後書き）

D Mの最終話になります。他に番外編をいくつか考えています。是非興味のある方はお読みください。最後にここまでお付き合いしていただいた方に多大なる感謝を。またどこかでお会いできますように。

番外編 【孤独の人形師】（前書き）

怜と師匠の話。時間的には本編の3話あたり。
3・6話を読んでから読むことをお勧めします。

番外編 【孤独の人形師】

番外編 【孤独の人形師】

お願いだから

独りにしないで。

寂しい。寂しい。寂しい。

寂しい。寂しい。寂しい。

寂しい。寂しい。寂しい。

「人形は人間と違って一生一緒にいてくれるんですね」

この質問をするのは2度目だった。師匠は1回目とは違う答えを出した。

優しい、けれどどこか悲しげな声で。

「君にもきつとできますよ。大丈夫。自分を信じなさい」

大切なことを教えてくれた、
いつも見守ってくれた大切な存在。

「私の人形は私の弱さでできているんです。君にはそうなって欲しくない」

「君には強い、希望のある心で人形を作って欲しいですね」

あの人の願い。
叶えたかった。

けど・・・できなかった。

寂しさや悲しさ。自分のためにしか作れない人形。
冷え切った心は貴方さえ憎んでしまいそうで怖い。
呪われた運命を全て貴方の所為にしてしまう。
醜い感情を全て貴方に向けてしまう。

弱い俺。

貴方の願った俺になりたかった。 それなのに・・・。

§§§

「・・・」

俺は目の前の人形を見つめた。

あの人に似せた人形は未だ完成していない。

何度やっても結果は全て同じだった。

あの人の魂はもう存在しない。

こうなるのは当たり前の結果なのだと

頭ではわかっていてもどうしても諦めきれなかった。

もう一度あの人に会って本当のことが知りたかった。

「こんな物・・・！作ってたって意味が無いんだ・・・！」

力いっぱい握りしめた拳。

爪がくい込んで皮膚が破ける。

僅かに血の・・・匂いがした。

「師匠・・・」

人形と人間は似ているけれど全く違う。

人間は必ず自分を置いていつてしまう。

そんなことわかりつきっていた。

・・・はずなのに。

それでも人の温かさを望んでしまうのは何故なのか。

「貴方ならあの時の様に答えをくれますか・・・？」

俺に技術くれた時のように——・・・

f i n .

番外編 【孤独の人形師】（後書き）

D Mの番外編になります。これからどんどん増えていく予定です。

番外編 【見てきた者達】

番外編 【見てきた者達】

満月が真上まで昇っている。街は静まりかえり、人の気配は家の奥へと消え去っている。

綺麗な店が建ち並ぶ街の中で一際小さい、かなり年季の入った店がある。

看板は無いので何の店かは定かではない。

その店の前——三段ほどの小さな階段に人影があつた。

人影は何をするわけでもなく、ただそこに座り月を見上げている。

その人は黒い髪を腰まで伸ばし、白いシャツと黒いスーツのズボンを適度に崩して身に纏っていた。その格好から男性だと分かるが、一見女性にも見えなくない、中性的な顔立ちをしていた。歳は25ほどだろうが、10代や30代だと言われても不思議に感じないように、実際の年齢をその容姿からは計り知れなかった。

不意に店の中から1人の老人が現れた。老人は持っていたランプの明かりを消し、月明かりに照らされている人影に近付き、声をかけた。

「どうしたんじゃ、時雨^{シグレ}。こんな時間に客でも来るかいのう？」

しわがれた老人の声は聞き取りづらかったが、その青年には届いたようだった。

時雨と呼ばれた青年は老人を振り返り、ふっと微笑んだ。

「いいえ。そういう訳じゃありませんよ、京葉^{ケイヨウ}。ただ私は――」
「ああ、月を見とったんじゃない」

京葉と呼ばれた老人は時雨の言葉を遮って言った。

「ええ」

「そついえば今日は奴の……啓^{ケイ}の命日じゃったな」
「……ええ」

京葉は時雨の隣に腰掛けるとゆっくりと話した。

「啓が死んで、もう何年になるかのう？」

「もう、50年になります」

「もうそんなになるのか……」

それきり二人は黙り込んだ。

「あそこの坊主はどうしてるかのう。^{サツキ}皐月を置きに来てから一度も顔を見せんのう」

しばらくして先に口を開いたのは京葉だった。

「坊主？……ああ、怜さん……でしたか。怜さんがどうかしたんですか？」

「うむ。こないだ、^{カナメ}要の所の孫娘が来たじやろう」

「ええ。雫さんもずいぶん大きくなりましたね」

「あの娘、あの館の場所を知りたいと言ってきおった」

「『人形館』について雫さんが？それで、教えたんですか？」

時雨は少し驚いたような顔をして聞き返した。

「ああ。どうしても行きたいと言っんで、道を教えてやった」

京葉は大したことではない、という口調で答えた。

それを聞いて、時雨はまったく、と言った表情をしたものの、すぐに真顔に戻る。

「雫さんは・・・人形師になりたいんでしょうか」

「そうじゃろうなあ。要の跡を継ぐんだと張り切っておったしのう。帰って来ない所を見ると、うまく弟子入りでもしたんじゃないかの」

時雨が真面目に聞いていても、京葉は飄々とした態度を崩すことはない。

「雫さんは、私や皐月^{サツキ}をまだ人間だと思っているのでしょうか」

「そうじゃのう。おそらく、人形だとは気付いてないのだろう」

「要さんの家系は何かと『人形館』の人形師達との関わりがありませんねえ」

時雨は呆れたような、感心したような調子で呟いた。

「うむ。要は啓へ、孫の陵^{リョウ}と雫は怜へ弟子入りした。繋がり深い連中じゃ」

「雫さんは、大丈夫でしょうか・・・」

「あの娘は言い出したら聞かん。何を言っても無駄じゃ。意外と根性も度胸もある。大丈夫じゃろう」

「そう、ですか」

時雨は安心したように肩の力を抜いた。

「しかし・・・あの一族の——坊主の真実を知って、あの娘はどうするのか・・・」

ぼそつと京葉は呟いた。この小さな呟きを時雨は聞き逃さなかった。

「真実・・・? どういう——」

「お父さん！兄さん！」

時雨の言葉を遮り、店の中から少女の声がした。

時雨と京葉が振り返るとそこには青いワンピースを着た、16・17歳程の少女が仁王立ちで二人を睨んでいた。時雨と同じ黒い髪を肩のあたりで切りそろえ、同じように端正な顔立ちをしていた。

「皐月」

京葉が少女の名を口にした。

「お父さんは早く寝なさい！明日もお仕事あるんだから！兄さんもお父さんをこんな時間まで付き合えないでよね！」

「皐月、わかったから。部屋を暖めてておくれ」

京葉は渋々、店の中へと戻っていく。

ふと、店への入り口で立ち止まると、まだ階段の下にいた時雨を振り返った。

「ほら、早くおいで。時雨」

京葉の優しい声音と表情を見て、時雨も微笑み返した。

「今行きますよ——父さん」

満月は西の空に消え、東の空はうつすらと明るくなり始めている。

また、いつもの朝がやってくる。

f i n .

番外編 【見てきた者達】（後書き）

DMの二つ目の番外編になります。

今回は本編の第1話でちよろつと出てきた情報屋の老人と人形達のお話です。登場人物をいつぺんに出しすぎました。判りづらい所もあつたと思うので、まとめておきます。

啓… 怜の師匠です。

要… 雫の祖父で京葉とは親友だつたり。

陵… 雫の兄です。雫が15の時に他界しています。

時雨（人形）… 京葉の元息子です。作者は啓です。

皐月（人形）… 京葉の元娘です。作者は怜です。

その他、不明な点は後々書いていこうと思います。

最後に読んでくださった方、有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3133b/>

Doll Master ‡ 人形師 ‡

2010年10月11日13時40分発行